和蘭の蘭印經營史

東京帝國大學助教授　板澤武雄

今日普通に南洋とは、わが南洋廳管内の群島を内南洋或は領内南洋と呼び、それ以外をひろく外南洋と稱してゐる。然るに嘗つては蘭印、チモール、フイリツピン等を表南洋といひ、わが南洋群島を裏南洋と呼んでゐた。これは日本の立場から言へば全く逆である。こんな逆な名稱を平氣で用ひてゐたのは日本の學問の或る一面を示すものであつた。

現在の南洋はその統治主體である國別で大きく地域を區別すれば八つに大別することが出來る。即ち、(一)わが南洋廳管内の南洋群島、(二)米領フイリツピン群島、(三)蘭領東印度諸島、(四)英領ボルネオ、(五)ポルトガル領チモール、(六)英領マレー、(七)タイ國、(八)佛領印度支那、以上の八つである。但し地理の方ではビルマを南洋に入れることもある。蘭印といふのはジヤヴア、スマトラ、ボルネオの南部五分の三、セレベス、モルツカス諸島、ニューギニアの西部半分其他で面積百九十萬四千平方粁、人口六千七十二萬七千人に達する廣大な地域である。和蘭本國は我が臺灣よりも少々狹い小國であるが、その植民地は實にその本國に六十倍する面積を持つてゐるのである。

人類の文化發展を普通に河川時代、内海時代、外洋時代の三階段に分つが、一四九二年コロンブスのアメリカ大陸發見からが、所謂外洋時代で、この外洋時代は大西洋印度洋時代から太平洋時代へと進展した。この時代からが西洋人の世界政策の時代である。世界政策といふのは、世界にわたる海事がその基礎をなすものであつて、航海・貿易・植民・

產業等の發展によつて、世界全般にわたる關係において優越した地位を獲得せんとすることである。世界政策の歷史を顧るに、第十五世紀より第十六世紀迄はスペインとポルトガルの優越時代、第十七紀前半は和蘭の優越時代、第十七世紀後半は和蘭と英國の競爭時代、第十八世紀前半は英國と佛國の競爭時代、第十八世紀後半より最近迄は英國の優越時代であつた。しかして產業革命以後は、原料の供給地と餘剩製品の販路獲得、投資地及び過剩人口の捌口を求めんとする新世界政策時代となり、海上航路の外に、鐵道、更に航空路へと、世界政策の樣相は漸く複雜を極める時代となつて來た。この幾變遷した世界政策の中に、十七世紀の殘骸を保つてゐる和蘭はまことに興味深いものがある。臺灣よりも少さいその本國は獨逸の電擊戰によつて征服されて女王も假政府もロンドンに在るのに和蘭が沒落せぬのは實に蘭印があるためである。彼等和蘭人は蘭印によつて本國復活を確信してゐるのである。しかし蘭印へ來るといふことは彼等は考へてゐないらしい。和蘭の諺に Oost West thuis best といふのがある。それは、東にも行く、西にも行くが、我が家にましたものはないといふ意味である。蘭印によつて儲けて恩給生活をしてゐる者が和蘭人である。蘭印は昨今はABCDラインの一環として盛んに日本に楯ついてゐるが、我が國と和蘭との關係は一六〇〇年からである。この年の四月十九日（慶長五年三月六日）に最初の和蘭船リーフデ號 Liefde が豐後に漂着した。我が國ではこの年の九月に關ケ原合戰があつた。その慶長五年以來三世紀半親交を保つて來たのである。その長い間の親交が今後どうなつてゆくか、この席では時局問題には觸れぬことにする。

和蘭の歷史を六期に分つと第一期は西紀四〇〇年頃迄のゲルマン・ロメーニス時代、第二期はそれより九〇〇年頃迄のフランク時代、第三期は一五八一年迄の封建時代、第四期は一七九五年迄の共和政時代、第五期は一八一三年迄の佛

國治下の時代、第六期はそれ以後の王政時代である。蘭印を語るには第三期の末期から話をすゝめればよいが、一四〇〇年頃から一五五五年迄は和蘭はブルゴン家の治下にあつた。一五五五年に獨逸皇帝カール五世（オーストリヤ大公フイリツプとイスパニヤ王女ジョアンナとの子）の子フイリツプ二世が相續支配することになり、和蘭はスペインの屬領となつた。然るに和蘭には新教徒が多く、スペインの王は舊教の擁護者を以て任じてゐたので、フイリツプ二世の治下に於ける和蘭の新教徒は彈壓を蒙つたであらうことは容易に想像出來る。やがてスペインに對する叛亂が起り、一五七九年六月にはユトレヒト同盟が結成せられ、ポーランド共他和蘭の七州が結束してスペインに對して抗爭することになり、英國の後援を得て一五八一年に獨立を宣言して共和政を布き一五八八年以後ヘーグ市が和蘭政府所在地となつた。フイリツプ二世は一五八〇年に母方のポルトガルの王位を併有するに至つたから、和蘭七州に對する報復手段として從來ポルトガルのリスボンで東洋の貨物を積込んで、これを歐洲諸國へ輸送してをつた和蘭の船舶の同港に入ることを一五八〇年に禁止してしまつた。然るにその結果はフイリツプ二世の豫想即ち和蘭商人が經濟的に參るであらうと思つたことは、皮肉にも裏切られて、これを機會として和蘭人が奮起し、急速に東洋へ進出することになつてしまつた。即ち一五九四年から九七年にかけて、歐洲から東洋への航路の發見が和蘭人によつて試みられた。コルネリス・デ・ハウトマンはリスボンに行つて東洋方面の事情を調査して歸り、アムステルダムの有力者を糾合して一航海會社を設立し、この會社の小型の四隻の船が一五九五年四月二日テキセルを出發し、この船隊は遂にスマトラの西、エンガノ島に到達した。そしてバンタムで胡椒を積込んで、たゞ一隻の僚船を失つたのみで一五九七年八月十四日にテキセルに歸着した。和蘭人は狂喜して一行の成功を喜び迎へた。この成功に刺戟されて、東洋を目的とする航海商事の會社が簇出した。企

業者が多數になるにつれて無制限の競爭が起り、同國人同志の激しい競爭が東印度諸島の住民の乘ずる處となつて、仕入價格の騰貴を來たし、生産早々のこの事業を不安に導いたばかりでなく、國策上からも當時和蘭は東洋に於けるスペイン、ポルトガルの勢力に對抗するためには、どうしても一團となつてこれに當る必要があつた。ヤン・フアン・オルデンバルネフエルーはプリンス・マウリツと協力して諸會社を合同せしめて强大な航海貿易の會社を設立しようと力めたが、一六〇〇年に至りアムステルダムの市當局者が先づ同市にある諸會社の合同に成功した。これが聯合東印度會社普通に和蘭東印度會社と呼ぶものであつて、會社の紋章Vは聯合東印度會社 Verecuigde Oost-indische Compagnie の三語の頭文字をとつたものである。蘭印の經營史はこの會社の經營を第一期として五つに分けることが出來る。

第一期聯合東印度會社經營時代、即ち西紀一六〇三年から一七九八年迄一九五年間の經營であつて、この時代は日本が鎖國をしたことが密接な關係がある。こゝで少しく鎖國政策のことを話すと、從來日本の歷史家の間に於ては鎖國政策の理解が全く淺いことは遺憾である。よくその功罪、得失論が云々されるが、利害相半ばするなどといふ議論は學問上成立するものではない。鎖國は完全に殘念なことであつた。德川一家の存立のために日本の海外發展が犧牲になつたのである。キリシタン禁止徹底のための鎖國などゝいふ議論は認識不足も甚だしい。邪教なるが故に禁止といふが實は鎖國後になつて基督教の教義がはつきりしたのであつて、それ以前には教義も判つてゐなかつたのである。またスペイン、ポルトガルの領土的野心を恐れて鎖國したといふが、その歷史的痕跡はない。たゞ和蘭がスペイン、ポルトガル人を驅逐するために領土的野心があると宣傳はしてゐる。鎖國は和蘭と德川幕府が結んだものといへるのである。スペインやポルトガルの世界政策以前は東洋貿易の覇者は日本人であつた。當時何れの國よりも秀でゝゐたのである。倭寇に

よつて鍛へられた航海技術はすばらしかつた。更に驚くべきことは、日本は經濟的に優越してゐたのである。東洋貿易は銀によつたが、これは日本の銀によつて行はれたのであつた。秀吉時代は金の產出が多いやうに一般に言ふが、銀の方が遙かに多かつた。金は却つて外國から持つて來たのである。日本の銀によつて支配された東洋貿易に便乘したのが和蘭である。日本人が今の佛印あたりへ行つたのは絹を持つて來るためであつた。それは銀によつた。銀で貸しつけてその住民の物の買占をやつた。この日本の經濟力のために、和蘭人などは手も出なかつた。日本にこの經濟力があつたために永祿慶長の役が出來たのである。秀吉こそ東亞建設の先驅者であつた。彼は日本の銀による東洋貿易の優越を知つてゐた。御朱印船によつて海外進出を謀つたのであるが、これが完成してゐたら秀吉の時に既に大東亞建設は成つてゐたであらう。秀吉と家康とを比較するとイデーの上に全く異るものがある。日本は德川幕府の學問制壓の害を今に至るまでも嗜々裡に受けてゐるのである。秀吉の大東亞建設事業は慶長三年彼の薨去によつて雄圖が挫折したが、それより和蘭が如何に東亞貿易の獨占に策動したかといふに、初めスペイン、ポルトガルを市場から追ふ爲に種々策動した。遂にこれが成功したのは、キリシタン禁止の政策によつたものである。和蘭はスペイン及びポルトガルの領土的野心を德川幕府に宣傳した。この驅逐戰が鎖國の第一階段に當る。しかし和蘭はスペイン及びポルトガルを驅逐しても、日本貿易に便乘してゐたので、日本人を貿易から追拂はねば、和蘭東印度會社は發展せぬ。そのために陰謀をやつたのである。德川幕府はその存立上から開國を危險とした。日本の貨幣が海外貿易をやつてゐると、幕府の經濟を覆へすことが出來る。それを知つた幕府は日本船を禁止して外國船による貿易にしてしまつたのである。これが鎖國の原因である。それは和蘭の利益と一致するのである。日本としてはまんまと和蘭の政策にひつかゝつてしまつた。德川二百年の存立

はこれによつて出來たが、日本の大損失であつた。もし鎖國しなかつたならば、日本の世界政策は既に出來上つてゐるであらう。和蘭東印度會社の成功は日本の鎖國によつて成立したのである。但し日本の銀の產額が減少したことによつても、貿易を後退せしめたものがあることは否み難い。以上は經濟史の具體的のものによつて理解出來るのである。從來の歷史的觀點は經濟史的に見直さなくてはならぬ。

さて和蘭東印度會社の經營はバタビヤに總督があつてやつてゐたが、アムステルダムの十七人重役會が全權を持つてゐた。會社は喜望峯以東マゼラン海峽以西の貿易・條約・軍備などの權も政府から委任された半官半民の會社であつたが單に南洋の住民から搾取するだけで、約二百年の間產業其他經營らしいことは何等やつてゐなかつた。專らバタビヤ其他三十餘ケ所の商館によつて貿易一點張で儲けたのであつたが、我が平戸後ちに出島の商館が一番儲かつた。この頃日本との貿易方法には二通りあつて、一つは Companise hander といつて會社公式の貿易で、日本ではこれを本方荷物（モトカタニモツ）と稱したが、もう一つは脇荷物といつて職員の私的貿易であつた。日本の學者などが洋書を手に入れるにはこの脇荷物によつたのである。職員はこの脇荷物がある爲に海上の危險を冒して貿易をやつたのである。會社は株式組織であつたが會計は祕密であつた爲に會社には危險性が內在してゐたが、また一方にはこの會計の祕密といふことが商賣の發展の基でもあつた。然るに會計の祕密性を重役が逆用して私腹を肥すに至つたので、流石の大會社も社運が次第に傾くに至つた。一七九一年に會社の破產狀態が本國株主の知る所となり、事實の調査と改革の斷行とを計らんがために、代表委員を蘭印へ派遣することゝなり、その結果種々組織の變更を施し、會社の名は存したが、行政權は全く國家の手に掌握される事となつた。然るに間もなく和蘭はバタビヤ共和國になつて會社は消滅して了つた。即ちこゝで蘭印經營

史の第二期に入るのである。

第二期バタビヤ共和國統治時代――會社の改革後間もなく一七九五年にフランス革命が勃發して和蘭本國は佛軍の侵略を蒙り、國王ウイルレム五世は英國に亡命し、和蘭はバタビヤ共和國となり、一七九八年共和國が會社の全所屬物を繼承し、會社の有せる特權を無效にし、アジア委員會をして植民地の事を管掌せしめることになつた。一八〇〇年（寛政十二年）にアジア委員會が會社の全機能を繼承することゝなり聯合東印度會社は名實共に消滅した。バタビヤ共和國は佛國と同盟して英國と交戰することゝなつたので、英國はこの機會を利用して蘭印を奪ひ取らうとした。バタビヤ共和國は一八〇六年六月五日を以て變じて和蘭王國となり、蘭印は佛國によつて經營されることになつた。

第三期佛領王國統治時代――ナポレオン一世の弟ルイ・ナポレオンが和蘭王に封ぜられ、デンデルス將軍（その名が雷の鳴るのに似てゐるので雷將軍と稱された）が喜望峯以東の蘭領全版圖の總督に任命せられた。デンデルスは一八〇八年一月バタビヤに着任したが、當時英人は海上到る處で和蘭人を威嚇し、爪哇の諸侯等も亦この機會に蹶起して和蘭の羈絆より脱せんと欲し、また島内の財源殆んど涸渇せる上に英國海軍のために封鎖せられ、貿易も極度に沈滯してゐた。デンデルスはこの頽勢を輓回せんと種々努力した。即ち交通路を作つて軍隊の移動を便にし、官吏の增俸を行つて住民よりの搾取を防止する等、これ迄放棄されてゐた經營がデンデルスにより初めて開發の緒についたが、和蘭本國に政變が起つて一八一〇年七月和蘭は佛帝國に併合せられ、一八一一年五月デンデルスは召還せられ、新總督ヤンセンス將軍が代つた。

第四期英國統治時代――この頃英國東印度會社の下級青年官吏トーマス・スタンフオード・ラツフルスはその會社の

總督ミント卿に爪哇を佛人の掌中より奪取せんことを進言してその容るゝところとなり、一八一一年八月八日にバタビヤ附近に一軍を上陸せしめて簡單に同地を占領し、爪哇及びその附屬地を英領とし、彼はそこの副總督に任ぜられた。日本の歴史書はこの頃に出島の商館のことを出してゐる。蘭印及びその本國も取られた時代に出島の記事を載せる等は滑稽至極である。この頃出島にゐたヘンドリツク・ヅースは本國から送金がないので借金をして十八年もゐたのであつたが何等仕事もないので蘭和辭典を作つてゐたのである。さてラツフルスはデンデルスの時開發の緒についた蘭印の經營を劃期的に實行した人で、蘭印を四つに分けて住民の負擔を輕減するために縱横にその手腕を揮つた。これは五ヶ年にすぎなかつたが、統治の理念をすつかり變へた政策であつた。然るに一八一三年ライプチツヒの一戰にナポレオン一世は慘敗し、それまで英國に亡命してゐたプリンス・フアン・オランエが歸國して和蘭の王位に即きウイルレム一世となつたので、一八一四年八月十三日英蘭兩國は條約を結んで、英國は喜望峯及びその他二三の地を除くの外、悉くその占領地を和蘭に還附することゝなり、爪哇は一八一六年再び蘭領となつた。英國が蘭領を還附したのは實はラツフルスの時代に餞饉があつて經營が收支償はず何等實益がなかつたからである。しかしこれは和蘭のためには誠に好都合であつた。もしラツフルスの時代に英國のために利益があつたなら、なか〳〵還附するやうなことはなかつたであらう。

第五期和蘭王國統治時代――一八一六年から今迄一二五年がその時代である。蘭印を恢復することを得た和蘭は植民地の行政・貿易等の大刷新を企てゝ新しい政策をたてんとした。その一つとして日蘭貿易の再檢討を行ふことゝなり、シーボルトを派遣して日本研究を行はしめた。彼が出島に着任したのは我が文政六年（一八二三年）であつたが、シーボルトの日本研究が如何に徹底的なものであつたか、また日本の蘭學即ち西洋科學の研究が彼の來朝を機として如何

に急速に發達したかは既に周知の通りである。次に蘭印に對してはCultuurstelsel即ち栽培法を實施した。それは和蘭本國に利益のあるものだけ栽培させる强制栽培法であるが、ともかく從來の搾取一點張の遣方を改めて開發を始めたのである。その結果今や蘭印は和蘭の寶庫どころではなく實に世界の寶庫となつてゐるのである。即ち石油は東亞の全產額の七割以上を占め、錫は世界產額の二割八分、ゴムは世界の三割三分以上、キナはジャワの西部に生產されるが、それだけで世界の九割を獨占、その他砂糖、茶、コーヒー、カポツク、コプラ、チーク材等、今日南洋資源として生產される凡ゆる資源は蘭印に最も豐富に、かつまた最も多種に亙つて生產されてゐるのである。和蘭は蘭印との關係をMoederland and onmondige doehter といふ言葉で表はしてゐるが、これは母と未定年の娘といふわけで、未定年だから面倒を見ねばならぬといふ一種恩にきせる口吻である。領有以來三世紀半、そのうち二百年以上の間は開發などせず放任して置いて住民から搾取するばかりであつて、そのあと百廿五年は未定年の娘といふことにして面倒を見たといひながら、實はその母たるものは冷酷な繼母であつたといふのが眞相で、娘は繼母の犧牲になつて遂にオールドミスになつてしまつた。しかも現在はその繼母が娘の處へころがり込んで來る狀態である。しかしながら三世紀半の腐り緣を持つてゐるので、この繼母と娘との關係は簡單には考へられない。我が國との關係も三世紀半に亙つてをり、こんな長い間親交を保つて來た國は他にないのであるから、世界の轉換期に當つて蘭印自體も深く考へなければならないであらうが、これ以上は時事問題になつて輕々しくは語られない。

（昭和十六年十月十一日講演要領筆記、文責在記者）